

Bed-Trick

Measure for Measure の一考察

舟 木 茂 子

Shakespeare の *Measure for Measure* は、問題劇あるいは問題喜劇といわれ、作者の意図、成果、喜劇性をめぐり多種多様の意見が提出されてきた。‘bed-trick’は、とりわけ現代人には不可解かつ不愉快なことで受け取られ、この作品の評価を低くする一因になっている。さらにこの‘bed-trick’は、その倫理性の欠如とともに、筋の展開からしてその導入は唐突であり、また女主人公 Isabella の性格の一貫性を損う要素となっているとして、非難を受けてきた。これらの非難は、はたして正当なものであろうか。この‘bed-trick’をめぐる問題点を再考することにより、この作品の本質、および Shakespeare 演劇の特質を明らかにすることができると考えられる。考察点は、演劇における性格批評の問題、主筋と脇筋すなわちダブルプロットの問題、そして喜劇と倫理性の問題である。

劇中の登場人物とはどのように我々観客に理解されるのであろうか。またある登場人物の一貫性とはどういうことをいうのであろうか。Isabella の人物描写そして作品 *Measure for Measure* は3幕1場の Claudio と Isabella の激しいやりとりの後、公爵が再び登場し、Claudio をなだめ、Isabella に‘bed-trick’を提案するところで、大きく変化すると言われている。ここを境に *Measure for Measure* は、悲劇仕立ての前半と喜劇仕立ての後半に2分されるという論がある。明日にも処刑される運命にある Claudio と、権力を盾にその Claudio を救う代償に Isabella の肉体を求めながら、その自己の内を覗き悩む Angelo、そして両者の狭間に置かれて、正義と慈悲の選択を強いられ、あくまでも女性の美德貞節を守り

抜こうとする Isabella の3人によって作り出された筋は、3人が悲劇の谷底に転げ落ちる寸前で大展開をみせる。すなわち‘bed-trick’によって解決の糸口が示される。冒頭で述べたように、この解決策‘bed-trick’の導入は唐突であり、悲劇的前半を後半喜劇としていくための、強引な手段であるとの非難があるのである。

今 Claudio, Angelo, Isabella の3人の作り出す筋と言ったが、これを *Measure for Measure* の主筋と言っている。一見悲劇を思わせる主筋の展開によって作り出される Isabella 像は、正義を尊ぶ一方慈悲を説き、純潔と名誉を至上のものとする若き見習尼僧の姿である。この姿は脇筋の、屈託のない現実主義的な、そして卑猥な庶民達とは全く対照的である。この Isabella が自らの純潔を守り、しかも兄 Claudio の命を助けるために Angelo の要求に応じる振りをして、実際には Mariana を身代りにする。ここに、Mariana と Angelo の関係はどうあれ、Isabella のとった態度は不可解だという評が生れる。ここで2つの疑問が浮かび上ってくる。このように主筋のみに力点を置いて、劇の展開と人物描写を理解する方法に向けられる疑問。次に、果してその悲劇的前半が真の悲劇になっているのかどうかという疑問である。

これら2つの疑問は不可分のものである。今問題になっている3幕1場の‘bed-trick’が提案される前後をまずみてみよう。3幕1場は、公爵が監獄に Claudio を訪ねて、彼に死を迎える心の準備をさせるところから始まる。この公爵の科白は、ルネッサンス期の“‘consolation’ literature”にみられるもので¹⁾、公爵の個性描写は意識的に回避され、さらに多種のレトリックを使った非常に技巧的な表現で、公爵の内面の表出を避け、あくまでも形式的な説論の言葉となっている。さらに注目すべきは、この37行に及ぶ公爵の言葉を聞いた後の Claudio の答え方である。

I humbly thank you.

To sue to live, I find I seek to die,
And seeking death, find life. Let it come on.

(III. i. 41-43)

実にあっさりと、死への覚悟を決めるのである。悲劇の主人公達が、内面の苦悩とか葛藤を経て、辿り着いた境地を表わしてはいない。この直後、Angelo との会見の結果を報せに兄 Claudio を訪ねてきた Isabella に、彼は “Now, sister, what’s the comfort?” (III. i. 54) と第一声を発する。Isabella は、彼の助命の途が全くないわけではないこと、すなわち Angelo に、彼の肉欲から出た卑劣な要求を突き付けられていることを話す。すると懸命に名誉を説く彼女の言葉は Claudio の心の奥底にまでは届かなくなる。彼の先の決心はさらに揺らぎ、自らの純潔を守り通すべく Angelo の要求をあくまで拒む妹に、Claudio は死への恐怖を語り、“Sweet sister, let me live.” (III. i. 132) と取りすがる。

ここで公爵が再び姿を現し、‘bed-trick’ 提案の場面となるのであるが、まず彼は、再度 Claudio を説得する。ここで公爵は始めて散文を使う。

Son, I have overheard what hath pass’d between you and your sister. Angelo had never the purpose to corrupt her; only he hath made an assay of her virtue to practice his judgment with the disposition of natures. She (having the truth of honor in her) hath made him that gracious denial which he is most glad to receive. I am confessor to Angelo, and I know this to be true; therefore prepare yourself to death. Do not satisfy your resolution with hopes that are fallible, to-morrow you must die; go to your knees, and make ready.

(III. i. 160-170)

この公爵の散文の特徴、効果については Brian Vickers が述べている

が⁽²⁾、前場の緊迫した状況から一転して、冷静な抑えた調子の場面に変ることは誰もが感じとることである。3幕1場の公爵の、死を前にした人間のとるべき姿勢を説く言葉とは違い、ここでは、事実（と思われるもの）を淡々と述べるのみである。この言葉に応じて Claudio は、即座に

Let me ask my sister pardon. I am so out of love with
life that I will sue to be rid of it. (III. i. 171-172)

と散文で答える。この3幕1場の Claudio からは、危機に直面した人間の諦観とか、熟慮の末の選択とかは浮かびあがってこない。彼の意志決定の仕方は、先に述べたように、苦悩、葛藤、省察を経てのそれではない。悲劇の中の意志決定とはなっていない。この場面で、機械的に公爵に反応し、決意を述べる Claudio から、彼の内面を窺い知ることはできない。これは、Shakespeare が意図したものと考えられる。それは、逆によく言われる Claudio の、生に執着した弱さをもつ、利己的な自己認識に欠けた青年といった性格、あるいは、優柔不断な人間が、外界の状況の変化に簡単に流され心変わりする性格、を示すことよりも、そうした人間像を観客に決定的に与える一歩手前で、Shakespeare は止まっていることを意味する。2回の公爵と Claudio のやりとりで、一方では、公爵は韻文で種々のレトリックを用い、当時の観客がすでに持っている死の受けとめ方を説く。その37行にわたる彼の科白には、公爵個人の個性、新しい思想は盛り込まれていず、観客は、表現の技巧に引きつけられ、内部に大きな感情の動きを感じることはないのではないか。また後の Claudio 説得では、全く違った表現形式すなわち散文を使い、しかも非常に散文的に、事柄を述べるに留まる。ここでの観客の反応はどのようなものとなるであろうか。観客は公爵が述べたことが事実ではないと感じるであろう。その反応を小さく抑えるために、Shakespeare は淡々とした理性に訴える表現形式を使い、それに Claudio の機械的な反応を続けている。ここで公爵の

説得のしかたが場当りのであるとか、Claudio に一本貫通した信念がないという評は当たらない。これらの評を観客に起こさせる強い反応誘起力はここにはないと思われる。ポイントは Claudio の機械的な反応、決意を示すことにあるといえよう。単に登場人物一人一人を抜き出し、性格描写を追うだけでなく、登場人物は常に一つの作品というコンテクストの中に置かなければならない。

コンテクストということは、作品全体すなわち、主筋、脇筋の問題となるが、その前に、Shakespeare が *Measure for Measure* の前半で描く主筋が果して真の悲劇になっているかどうか、また主筋を構成する Claudio, Angelo, Isabella が、悲劇の登場人物達と同質に描かれているか否かを見てみたい。Claudio の意志決定の仕方が、悲劇の中の人物のそれではないことはすでにみた。処刑を目前にした Claudio とは違った意味で、Isabella も重大な危機に直面している。彼女には、正義か慈悲か、兄の命か自らの純潔か、尊厳に満ちた死か屈辱的な生か等、いくつもの選択が課せられている。これらの選択は、独立したものではなく、複雑に絡み合い、選択不可能ともみえるものとなる。この選択を引き受けなければならない Isabella が出した答は、“Isabella, live chaste, and, brother, die” (II. iv. 184) である。この Isabella を中心に *Measure for Measure* における選択の特質は、拙論「*Measure for Measure* における二者択一」³⁾ で述べてあるので、詳細は繰り返さないが、Isabella を始め、この作品の登場人物達の選択の仕方は、悲劇の中の登場人物達のそれとは決定的に違っている。それぞれに課せられた選択事項を全て含ませた選択を自ら引き受けることはしない。そして Angelo, Isabella, Claudio の選択したものは、それぞれ欲望に従うことであり、貞節に生きようとすることであり、死刑をなんとか免れて生きようとすることであった。しかもそれらは他人の盲目性を当てにしたり、他人を犠牲にして成り立つもので、そこに貫かれているものは強い‘生’への欲求である。

この‘生’への指向が、*Measure for Measure* の脇筋が示す価値観の基盤である。そして、この作品における‘死’の特質、あるいは‘性’と‘生’の関係を通して、その脇筋の世界が当初より主筋の世界に入り込んでいることが、明らかに認められる。*Measure for Measure* は決して前半悲劇、後半喜劇と2分されるものではない⁽⁴⁾。Claudio の“Sweet sister, let me live.”を聞くや否や、Isabella の怒りは極度に達し、激しい叱責と糾弾の言葉を吐く。

O you beast!

O faithless coward! O dishonest wretch!

Wilt thou be made a man out of my vice?

Is't not a kind of incest, to take life

From thine own sister's shame? What should I think?

Heaven shield my mother play'd my father fair!

For such a warped slip of wilderness

Ne'er issu'd from his blood. Take my defiance!

Die, perish! Might but my bending down

Reprieve thee from thy fate, it should proceed.

I'll pray a thousand prayers for thy death,

No word to save thee.

(III. i. 135-146)

貞節という美德を第一とする若い見習尼僧の Isabella が使う言葉である。Claudio の願い、すなわち Angelo に身を委せるようにとの要求が、どれほど Isabella の嫌悪するものであるかを示しているのであるが、‘seven deadly sins’の1つの‘anger’の罪を犯しているともいえる強い口調である。さらにここで、すでに2幕4場の Isabella の科白にみられたエロティックな含意⁽⁵⁾は、一層露わな表現となり、兄妹の間の近親相姦や母親の不義にまで及ぶに至った。ここに意識上は、兄の犯した罪は、本来罰せられるべきものとする正義感をもち、貞節を至上のものとし、汚れた不名誉な生よりは名誉ある死をと主張する Isabella の意識下の性意

識が示されている。ここで我々観客は、Isabella に不快感を感じ、彼女の二面性を拒否するであろうか。確かに、Isabella に対して、十全なる共感は寄せられない。しかし彼女の口調、自覚されない性意識に赤い血の流れる人間を感じる。その Isabella に対する我々の批判は、狭い性格批評的な彼女の人間性批判でもないし、いわんや Shakespeare の人間描写の一貫性の欠如という批評となって出てくるものではない。それは、この作品が示そうとしている、人間の強ばった姿勢に対する批判につながるものである。観客にこの反応を引き起こさせるものは、この場面に至るまでに脇筋がもつ主筋を調整する力である。

よく言われる主筋と脇筋の有機的統一は、いくつかのレベルで検討されるべきものである。*Measure for Measure* においては、まず‘性’に関する言葉が、脇筋の喜劇的な人物から次第に主筋を構成する人物達に広がっていく。主筋と脇筋の言葉による有機的つながり、融合が認められる⁶⁾。さらに、主筋と脇筋の人物の間の照応関係が、Lucio と Angelo の間にみられる。Angelo は、Mariana との婚約を破棄すると同時に、彼女を中傷していた。Lucio は、女性達に舌先三寸の甘言を使い弄んでいと広言している。Lucio では、或る女性に子供を生ませて放り出すという、女性との関係は前歴として語られ、劇中では、誰彼なしに中傷的な言葉を浴びせる。言葉による悪行が積み重ねられている。Angelo では、中傷は過去のものとして3幕1場になって明らかにされ、劇の進行と共に、アクションとして示されるのは、彼の欲情であり、Mariana を凌辱することである。Angelo と Lucio は重なり補完し合って、悪の諸相を示している。この作品では、主筋と脇筋によって全く対照的な価値観が提示されている。主筋が主張するのは、完全な手続きを済ませずに事実上結婚し、間もなく子供が生まれてくるという事態を招いた Claudio と Juliet の行為は悪であり、Claudio を極刑に付すべきであるとする法律に端的に示される正義である。他方、脇筋においては、公爵がこの法の執行を長年

せずにおいたために、性の頽廃が極度に進んだ世界の住人達が、その法律のばかばかしさを笑いの対象にし、極端な法律主義を揶揄している。ここでは、赤い暖かい血の流れる Lucio および庶民達の率直で、直感力と生命力にあふれた基準、価値観が示されている。重要なことは、これら2つの価値観が単に並置されているのではなく、劇の進行とともに、観客の意識に強く脇筋の価値観が働きかけ、主筋を構成している登場人物達に次第に明らかになる、‘性意識’と‘生’への指向を、この作品全体の流れ、指向として受け入れさせる機能をもつことである。

我々観客は、起承転結のある主筋、それを構成する登場人物の性格や科白といったさまざまな要因の働きかけによって、まず反応を生ぜしめられる。それと同時に、より深い部分で、その反応を規制し、方向づける反応が生じている。この反応を生ぜしめるのは、劇作家と観客が共通してもつ文化的、歴史的過去の遺産、イメージラリー、場面の配置、脇筋の働き等である。‘bed-trick’は、中世以来流布していた民話の中に登場しており、近世になって劇に度々取り入れられた慣習的な技法であった。この技法は道德上の問題を含んではいるものの、当時の観客は、今日の観客よりはるかに抵抗なく‘bed-trick’を受容し、そこに、愛、結婚、性、生殖、生を連想したことは、容易に想像できる。この‘bed-trick’が生ぜしめる観客の深層における連想は、すでに度々、‘性’、‘生’という言葉で繰り返してきた、この作品のあらゆるレベルで見出される特質と連結するものである。単に‘bed-trick’は、Isabellaの困難な状況、そしてClaudioの直面する問題を解決する手段としてのみ、唐突に導入されたものではない。‘bed-trick’はその歴史性と‘性’と‘生’とのつながりから、すでに観客の深層を支配してきた大きなエネルギーと一つになるものである。

Claudioの明日にもという死が用意されて始まる作品ではあるが、このClaudioの‘死’は、未だ起こらざるもので、現実にあるのは死への恐怖であり、それは生への執着心と表裏一体となって示される。この主筋によ

って示される‘死’と‘生’の結びつきは、イメージリーを通して繰り返される。‘死’の想念は、‘性’と‘生’の連想を生み、観客の中で次第にその色を濃くしていく。この観客意識を深層において最も強力に支配するものが、この作品にあっては脇筋である。

脇筋の内容と共に、場面配置が観客心理に大きな影響を与えることは当然である。単純に場面の長さに比例して、その影響力の大小が量れるものではないし、厳密に主筋、脇筋の区別ができるものでもないが、*Measure for Measure* の2幕までの脇筋の分量は主筋の7割位はある。しかも、場面配置が効果的である。1幕2場での Lucio と2人の紳士の軽口の叩き合いで始まる場面は、1幕1場で示される理想的人間像を打ち壊す。さらに、縄をかけられた Claudio は妊娠した Juliet とともに登場する。その2人を前に、Lucio は卑猥な表現で、Claudio の犯した行為と現状を活写し、さらに Claudio の上に下った判決を Claudio の身を案じるより、Lucio らの生き方が通せなくなるが故に、取り消させなければならないと言っている。さらに Lucio は、尼僧院に Isabella を訪ねてやはりきわどい表現で、非人間的な Angelo 像を描く。この後、Isabella が Angelo を訪ねる前に、2幕1場での特に Pompey と Esculus の場面で十分に、Angelo が示そうとする正義の非人間性が、大げさな表現で観客に大きな笑いを引き起こしつつ示され、‘性’と‘生’を第一にする価値観が観客の深層に入り込むこととなる。

Measure for Measure における‘bed-trick’の性格はすでに見た通りであるが、これが公爵によって提案される所を具体的にみてみよう。公爵の説得によって Claudio は死を迎える覚悟を表明して、Provost とともに退く。その後で公爵は、Claudio に対したと同じように続けて散文で Isabella に‘bed-trick’を提案する。この場面では Isabella も散文を使う。Isabella が唯一散文を使う場面である。場所は監獄の一隅。ここで、すでに指摘したように、前場面の緊迫した場面と打って違って、静

かな，抑えた調子の場面が作り出される。この場面では両者とも淡々と言葉を運ぶ。特に Isabella の話しぶりは，この前の激高した彼女のそれとは大きな違いを見せている。公爵の提案が示されるところからの彼女の答えを見てみよう。

Let me hear you speak farther. I have spirit to do any thing that appears not foul in the truth of my spirit.

(III. i. 205-207)

I have heard of the lady, and good words went with her name.

(III. i. 211-212)

Can this be so? Did Angelo so leave her?

(III. i. 224)

What a merit were it in death to take this poor maid from the world! What corruption in this life, that it will let this man live! But how out of this can she avail?

(III. i. 231-234)

Show me how, good father.

(III. i. 238)

The image of it gives me content already, and I trust it will grow to a most prosperous perfection.

(III. i. 259-260)

I thank you for this comfort. Fare you well, good father.

(III. i. 268-269)

この Isabella の最後の科白で3幕1場は終る。上記の Isabella の科白の4番目の言葉 (What a merit . . .) は，Angelo の Mariana に対する仕打ちと彼女の悲しみに対する感想で，‘死’と‘生’の対比と，What で始まる感嘆文を2つ重ねる技巧がみられる。これを除いて，他は全く散

文的に感情をほとんど交えず、必要最少限度のことを言っているだけである。

公爵の科白は、長さにおいて Isabella の科白とは比較にならない程長く、技巧もこらされ形式的な印象を与える。そこにはやはり冷静さが強く表わされている。ただ Angelo の Mariana への裏切りと彼女の悲嘆ぶりを示すために‘涙’のイメージが使われ、231行—234行の Isabella の答えを引き出し、観客に Angelo の仕打ちの酷さを印象付けている。この場面全体の抑えた調子は一時観客の心理的緊張を緩める効果をもち、観客に‘bed-trick’受容をより容易にさせる。特に Isabella の極度に切り詰められた言葉に、観客は、Isabella の性格や人間性への問いかけという反応を示すことはないと考えられる。観客の視線は公爵の方に向けられるであろう。公爵は、‘bed-trick’の意義、効果すなわち、Mariana を救済し、Claudio の命を助け、Isabella の純潔を守ることができることを3回繰り返す。

この3幕1場の終りで、公爵は、セント・リュークス院に直ちに行くことを告げるが、このセント・リュークス院の場面の前に、まず Elbow と Pompey が役人達と登場する場面（3幕2場）が入る。ここに Lucio, Mistress Overdone も続いて加わり脇筋が展開される。ここで‘bed-trick’につきまとう道徳上の不安は脇筋の価値観に吸収される。Elbow, Pompey, Lucio, Mistress Overdone の言動は、同種同質のものではないが、共通して観客の笑いを引き起こす。この笑いは、個々の言動の主である人物に対する笑い、彼らの言葉が向けられる相手に対する笑い、両者の合わさったものを含む。それと同時に、こうした笑いを発する観客の中に、ここには登場しない主筋の中の人物達の言葉、意識、行動のもつ滑稽さが浮かび上ってくる。それは、主筋の中の人物達の強ばった姿勢にみられる滑稽さである。

観客が劇の進行をどのように追い、最終的に作品全体のもつ意味をどの

ように捉えるかは、難しい問題である。通常は、主筋の展開にまず意識が向けられ、その意識の流れを脇筋が色々に規制していくと考えられるが、常にそのように観客の受容姿勢が一定しているとは言い難い。時に脇筋の発するエネルギーが、主筋を引っ張っていくこともあろう。今日の上演方法と、エリザベス朝の上演方法の違いをみると、場面の区分のないスピーディーな上演方法がとられたエリザベス朝の舞台では、より主筋と脇筋の接触、交錯は緊密で、濃厚なものとなつて、観客に両者は不可分のものとして受け入れられたであろう。ダブルプロットにみられる重層性は、Shakespeare 劇の特徴の一つである。

現代人が殊更に指摘する‘bed-trick’の倫理性の欠如は、劇の流れの中で、明確に観客が意識するとは考えられない。しかし作品全体を貫く、‘性’をめぐる考え方、行動には道德上の問題がつきまとう。ここでこの小論の最後の考察点である、喜劇と倫理性の問題に突き当たる。喜劇は当然そこに笑いがある。それは単に可笑しい登場人物、言葉、行動が用意されていることのみを意味しているのではない。喜劇が引き起こす笑いは、観客をして社会の規律や禁忌から解放させるエネルギーを持ち、観客を‘生’のリズムに乗せる働きを持つ。社会の規律が枠の中に抑え込もうとする代表的なものが‘性’である。*Measure for Measure* には性の商品化、卑劣な取引としての肉体の要求、裏切りそして3幕1場の *Isabella* の科白にみられた近親相姦や不義等、性にまといつく不快な面、あるいは禁忌が繰り返される一方、登場人物、言葉、行動が引き起こす多種多様の笑いの多くは、‘性’と‘生’を軸にして生じ、それらが一つのうねりとなつて、観客の心を奥底から揺り動かし、観客をして‘性’に代表される道德の枠を超えさせ、自由な‘生’を意識させる。この自由は放逸を意味するのではない。自由な‘生’を意識することは、すでに度々述べている、冷やかな、厳しい論理の世界にのみ生きる人物達の、強ばった姿勢に対する批判を生む。この批判は、観客に、人間には誰にも赤い暖い血が流れているこ

とを自覚させ、全的な生き方とは、という問題を意識させるものである。

〈注〉

テキストは、G. Blakemore Evans (ed.), *The Riverside Shakespeare*, Boston, 1974 を使用した。

- (1) J. W. Lever (ed.), *Measure for Measure* (The Arden Shakespeare), London, 1965, p. 66.
- (2) Brian Vickers, *The Artistry of Shakespeare's Prose*, London, 1968, pp. 319-320.
- (3) 『紀要』14号, 調布学園女子短期大学諸学研究会, 1981, pp. 1-23.
- (4) 拙論「*Measure for Measure* における喜劇性」『英米の文学と言語』篠崎書林, 1981, pp. 107-118. および「*Measure for Measure* における二者択一」を参照されたい。
- (5) As much for my poor brother as myself :
That is, were I under the terms of death,
Th' impression of keen whips I'd wear as rubies,
And strip myself to death, as to a bed
That longing have been sick for, ere I'd yield
My body up to shame. (II. iv. 99-104)
- (6) 「*Measure for Measure* における喜劇性」を参照されたい。